ラックスマン・製品のあゆみ

1925年　ＬＵＸの前身である大阪の絵画・額縁商「錦水堂」は同年、ラジオ部を創設。「一読たちまちラヂオ通になれる」と銘打って「錦水堂ラヂオブック」と呼ばれる日本で初めてのラジオ解説書を刊行、最終的には14版を重ねるベストセラー誌に。現在のオーディオエンジニアにも影響を与えた雑誌として知られている。

1928年　ハイファイラジオLUX-735、マグネティック・ホーンスピーカー発売。

1952年　創業当時から各種オーディオパーツの製作を手掛け、OY型出力トランスを始めとする様々な高品位パーツを完成させる。

1958年　45/45ステレオレコードが発売開始になり、ソースの中心がラジオからレコード再生機へと転換を始める。同年発売のMA-7Aは戦後初めてのフルアッセンブルによるハイファイ真空管パワーアンプで、世界特許取得の独自技術・クロスオーバーNFB回路を採用。

1961年　初期のステレオプリメインアンプの代表作である真空管式のSQ-5Aは、パワーメーターを中央に配した個性的かつ斬新なデザインで大ヒット。

1962年　この年投入の真空管プリメインアンプSQ-65は、特許取得技術のモーショナルフィードバック回路を搭載。また、日本で初めてゲルマニウム・トランジスタを用いたスリムなデザインのフォノイコライザーアンプPZ-11も人気を呼んだ。

1964年　木製キャビネットとアルミ削り出しフロントパネルのデザインで誕生した真空管プリメインアンプSQ-38は後に38D、38F、38FD、70周年記念モデル38Sまで続く人気シリーズに。当時のジャズ喫茶などにはほとんど置かれていたハイファイアンプの定番だった。

1966年　出力トランスを持たないOTL(Output Transformer-Less)真空管アンプMQ-36は、味わい深い独特の音質でロングセラーを記録した。

1968年　現在のプリメインアンプ500シリーズの原形となるSQ-505、507を発売。デザインや音質はL-507や509fなどにも引継がれている。

1971-1980年　「LUXキット」社を設立し、約70品目の真空管アンプ、トランジスターアンプ、ターンテーブル、計測器など発売。オーディオマニアのイニシアティブを取るブランドとなる。

1972年　新たなオーディオスタイルを提案する「L&G」ブランドを設立。オレンジ色と白色を基調としたデザインのオーディオシステムは、時代を先取りするユーザーの支持を得た。

1975年　LUXは50周年を迎え、海外進出も積極的な展開を始める。ハイエンド市場に向けたハイパワーアンプM-6000は、300W×2chの出力と優れた音質で海外でも高い評価を得た。

1977年　新しいコンポシステム「ラボラトリー・リファレンス・シリーズ」を発売。アンプには世界初のDCアンプ構成を採用。シンセサイザーチューナーや高性能イコライザーなど最新技術を結集した。

1980年　アナログレコードの盤面とターンテーブルの間を真空化して吸着させるバキュアム・チューブ・スタイビライザーを搭載した画期的な機構のアナログターンテーブルを発売。

1987年　筑波大の寅一教授による関数補完理論を応用したフルエンシーDACを開発。CDには記録されていない可聴帯域以外の帯域を再生成する同技術は現在のユニバーサルプレヤーにも引き継がれている。

1990年　トップローディング方式採用のCDプレヤーD―５００Ｘ’ｓを発売。フィリップスCDM-3メカ搭載など豪華な作りで関心を集めた。

1995年　創業70周年記念モデルの真空管プリメインアンプＳＱ―３８ｓは出力管EL34をプッシュプルで使用したオーソドックスなウィリアムソン回路を採用し、長年の真空管ノウハウで音質を磨き上げた。

1996年　シャンペンゴールドで新デザインのプリアンプＣ―１０を発売、モノラルパワーアンプＢ―１０とのフラグシップ・セパレートアンプを構築。

1999年　新帰還回路ODNF方式を採用した車載用パワーアンプの第１弾ＣＭ―２１００を発売。ホームオーディオと同じ音質的価値観をカー業界に持ち込んだ製品として驚きをもって迎えられた。

2001年　ハイエンドオーディオの世界にユニバーサルプレヤーという概念を初めて提案したエポックメイキングなDU-10は、SACDやDVDオーディオといった新たな音楽フォーマットを高音質に楽しむという未知の音楽スタイルに果敢に挑んだ製品として、多くのマニアを唸らせた。

2003年　マルチチャンネルセパレートアンプＣＵ―８０、ＭＵ―８０はホームシアターだけでなく、SACDやDVDオーディオの無圧縮高音質マルチチャンネルを楽しみたいという音楽ファンの要望に応えた。

2004年　11年ぶりの真空管セパレートアンプの新製品CL-８８、ＭＱ-８８は、従来の真空管アンプ然としたデザインをリセットし、デザイナーからの斬新な初期提案がほぼそのまま量産でも採用された。

2005年　10年ごとにリニューアルされるフラグシップ機として、かつてないほどの物量と投入コストの許されたプリアンプＣ―１０００ｆ、モノラルパワーアンプＢ―１０００ｆを発売し、大きな話題を呼んだ。

2006年　A4サイズの筐体ながら、本格的な真空管アンプによる濃厚なサウンドが楽しめるレトロモダンデザインのNeoClassicoシリーズがヒット。

2008年　伝統の38シリーズ最新モデルとして、新設計のSQ-38uが登場。また同時期にオリジナルメカを搭載した弩級のCD/SACDプレヤーD-08uも発売され、懐古主義と最先端志向の両提案が話題となる。

2010年　パソコンとオーディオシステムをUSBによるデジタルケーブルで接続するPCオーディオの世界を様々な世代に広めた大ヒット製品。コンパクトな筐体に本格的なヘッドホン出力回路も装備。

2010年　プリメインアンプのメインストリーム500シリーズが15年ぶりに完全新規設計のモデルチェンジを果たし、その第一弾として純A級30Wを誇る最上位機種のL-590AXが登場。

2011年　28年ぶりに開発された質実剛健な作りのベルトドライブ式アナログプレーヤーPD-171を発表。オーディオ本来の趣味性の高い音楽体験が可能なアナログブーム再燃のきっかけとなった製品として話題になる。

2013年　増幅回路ODNF4.0や電子制御アッテネーターLECUA1000など、90周年に向けて現在のラックスマンの最新技術の粋を結集したセパレートアンプシリーズ最上位機種C-900u／M-900u。大型の針式メーターの復活も歓迎された。

2015年　音質や音色だけでなく、ユーザー自らのセッティングや調整によってレコードの本質を引き出すというコンセプトで開発された、全段真空管によるCR型フォノイコライザーアンプEQ-500を発売。

ラックスマン

オーディオ一筋90年

世界最古の音響専業メーカー

ラックスマンは、6月に創業90周年を迎えた。オーディオ専業メーカーとしては、同社が世界で一番古いメーカーとみられている。それだけに「音響機器・オーディオを〝趣味〟のものにしたのは当社が最初だった」という土井和幸社長の話にも頷ける。土井社長が入社以来不変と強調する「妥協が全くないこだわりの物づくり」。これがオーディオ一筋90年のラックスマンスピリットのようだ。当面の節目〝創業100周年〟に向け、ラックスマン丸は順風に帆を上げた。

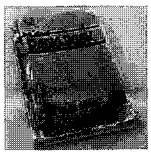
妥協は全くない こだわりの物作り

特に真空管アンプの設計を得意とする技術者でもある土井社長は、同社のこだわりの物づくりの一端を熱く語る。

「お客さんの要望や意見を聞きながら、自分たちの欲しいものを作っている。ただ、そこには妥協が全くないこだわりの物づくりがある。配線基板のパターンも電子が渋滞しないように角々（かくかく）でないなだらかなパターンにするなど、電子の気持ちになってパターンを作っている。また38FDの配線は東ね方を徹底的にネジをトルク管理したり、私が入社した時には既にあった真空管アンプを含めて現在の製品以上にきれいな配線になっているなど、昔からこだわりの物づくりを続けている」と。

「配線基板のパターンも電子の気持ちになって作っている」と語る土井和幸社長

別掲「ラックスマン・製品のあゆみ」の通り、1925年（大正14年）、額縁商・錦水堂のラジオ部でスタートした同社はラジオ解説書を刊行している。ラジオ作りのテキストである同書のサブタイトルには「面白きラヂオの話」とあり、ラジオの製作を趣味とする手引書となっている。同解説書は「恐らく日本最古のラジオ技術解説書だろうと言われている」（土井社長）という。「創業家・早川一家の何人かが海外留学で電気について学び、帰国後に電子部品を輸入してラジオ製作を事業化した」（同）というわけだ。



創業時に刊行した日本初のラジオ解説書

1961年（昭和36年）にラックスに社名変更。2000年（平成12年）にイーラックスに社名変更するとともに、オーディオ専業の「ラックスマン」を設立、現在に至る。90年の歴史のうち創業家・早川一族の社長が73年間続いた。社長を最も長く務めたのが初代早川迭雄氏の長男・斉氏（09年没）で、28年間の長期政権だった。13年前の02年に就任した土井社長は7代目で、創業家以外の人物で1年以上続いた社長は土井氏だけ。土井社長は前1月期に9期連続の増収増益を記録しているなど、正に〝中興の祖〟である。

―オーディオ専業メーカーとして90年も続いている要因は何ですか。

土井社長　ある書物に、日本には100年以上存続している企業が5万社を超えるが、これらの共通点は『本業重視』だと書かれている。なるほど当社も、かつて車用エンジンスタータ、ホンアンプやUSB・DAコンバーターを逸早く手がけて軌道に乗せたが、世の中の変化にうまく対応できているのではと思う。

―これまでのエポックメーキングな出来事、あるいは印象深い出来事は。

土井　40年前の入社以来、親会社を何社も経験してきたのが印象深い。商品メーキングな出来事、あるいは印象深い出来事は。

土井　40年前の入社以来、親会社を何社も経験してきたのが印象深い。商品

ラックスマンは、90周年記念施策の一環として、6月15日から製品の無償保証期間を延長する「プレミアム延長保証制度」をスタートする。これまでの製品無償保証期間は標準2年だが、全国約200店の同社正規取扱店での購入を前提条件に、保証期間を7年間と3年間に延長する。

7年間保証になる製品は延長保証の登録は、6月15日以降、製品に同梱される延長保証登録申請書に必要事項を記入し、正規取扱店での購入証明（領収書やレシートの写し）を貼り付けてラックスマンまで郵送すれば登録される。登録後、無償保証期間が印字された「クラブ・ラックスマン」カードが送られる。

6月15日以前に購入した製品についても「クラブ・ラックスマン」カードの提示でプレミアム延長保証制度の対象となり、製品購入日から7年間、あるいは3年間の無償保証が適用される。

最長7年保証に延長

ラックスマン　創業90周年を機に

パーター。3年間保証になるのは真空管アンプ、CD／SACDプレヤー、アナログプレヤー。

真空管式以外のトランジスターアンプ（プリメインアンプ、コントロールアンプ、パワーアンプ）、D／Aコンバーター。3年間保証になるのは真空管アンプ、CD／SACDプレヤー、アナログプレヤー。

延長保証線上のことだが、社員が自分で使いたいもの、欲しいもの、しかも特性やデザインが誰にも真似のできないようなものを作っていくことに徹していく。それに飽くまで本業重視で、ご販売店・お客さまの期待を裏切らないような物づくりをしていく。

―今期（12月期）の新製品投入計画と、営業戦略は如何ですか。

土井　8モデルを90周年記念モデルとして投入する。4月に発売した真空管フォノイコライザーアンプEQ―500（税別50万円）、6月下旬に発売する純A級プリメインアンプL―590AXⅡ（同58万円）、電源ボックスES―35（同5万5000円）のあと、真空管セパレートアンプ、SACDプレヤー、D／Aコンバーター、真空管300B使用で100数十万円の真空管アンプを投入する。

営業施策では、正規代理店で商品を購入いただいた場合、7年間保証と3年間保証に保証を延長して記事別掲＝ご販売店、お客さまに喜んでいただくようにした。特に5月頃まで、お客さまからの電話による問合せが殺到した。

やターンテーブルを水に浮かせて回すアナログプレヤーの試作品をオーディオフェアに出品したなど、ユニークで面白い試みも多かった。やはりCDの登場以降は、アナログオーディオ機器のような遊びの要素はさせるアナログプレヤーの発売も話題を呼んだ。またカセットテープのテープ自体をオープンリールデッキのように外に引出して使用する高音質カセットデッキでは、当社はオーディオマニアが高額過ぎて買えないような試作品をオーディオ業界に出品したなど、ユニークで面白い試みも多かった。やはりCDの登場以降は、アナログオーディオ機器のような遊びの要素は少なくなった。

―このところ、若い層のラックスマンファンが増えているようですね。

土井　02年にフルサイズのヘッドホン専用パワーアンプの名称（現在のヘッドホンアンプ）でP―1を発売したところ、ヘッドホンで音楽を楽しむオーディオマニアも増え、ラックスマン製品を購入する新しいユーザーが急増した。P―1を発売した頃はヘッドホンブームはまだ来ていなかったが、ヘッドホンで音楽を聴くことが若い人たちに合っていたと言える。またゲームユーザーが、夜中にいい音を大音量で聴きながらゲームをするニーズもあったと思う。カーオーディオのパワーアンプを13年まで発売していたが、これも若い人の購入が多くて、当社ホームオーディオにつながった人も相当いる。

―今後の物づくりの姿勢・方針は。

土井　基本的には現在の